

ボン・サンスの教育論と理性の哲学*

——ルソーの『エミール』について——

紺 田 千 登 史**

第二部 ボン・サンスの心理的、発生的記述

第二節 発達の各段階におけるボン・サンスの教育—自愛の教育からはじめて共生の教育へ(つづき)

四、15歳以降の青年期

生活に必要なものを手に入れるためにはひとりで努力するよりも多くの人々と協力しあい、またたがいに得意な分野を分担しあっていくほうがはるかに効率的であることを学んだエミールはしだいに社会生活の必要に目覚めていくことになるが、この時期をもういちど子どもの成長の見地からとらえなおしていえば、それはまさにたんなる感覚の段階からすぐれて社会的な感覚としてのボン・サンスの習得の段階への移行期でもあるということができよう。ところでこの感覚とボン・サンス、ならびに両者のからみについてはベルクソンがまことに興味深いことを語っているのでそれからまず見ておくことにしたい。「わたしたちの感覚(sens, サンス)の役割は一般的に言って物質的な対象をわたしたちに認識させるというよりもそうしたものの有用性をわたしたちに知らせるところにあります。わたしたちはさまざまな味覚を味わい、臭いを嗅ぎ、暑さと寒さを、光りと陰を区別します。けれども科学はわたしたちにこれらの性質のいずれもがわたしたちがそれらを知覚するような形式においては対象に属していないと教えています。そういった性質はただその色彩豊かな言語でもってわたしたちに事物がわ

たしたちにたいして有している不都合ないし便宜を、それらがわたしたちにたいしておこなってくれるかもしれない奉仕を、それらがわたしたちにおかさせることになるかもしれない危険をつたえているだけなのです。つまりわたしたちの感覚はなによりもまず空間のなかでわたしたちを方位づけるのに役だってくれているということなのです。いいかえれば、感覚は科学ではなく生活に向けられているということです。ところでわたしたちはたんに物質的な環境のなかだけでなく同時に社会的な環境のなかでも暮らしています。一方で、わたしたちのすべての運動が空間のなかにつたえられ、そのことによって物理的宇宙の一部が揺り動かされるとしますと、他方で、わたしたちの行動の大部分はよきにつけあしきにつけその直接的あるいは間接的な結果をまずわたしたち自身にたいして、ついでわたしたちをとり巻く社会にたいしておよぼしていく、ということです。そうした結果を予見すること、あるいはむしろそうした結果を予感すること、行動の領分において重要なものを付随的なもしくは関係のないものから区別すること、さまざまな可能な手段のなかからもっとも多くの、しかもたんに想像可能なというようなことでなくあくまでも実現可能な利益をもたらしてくれるような手段を選びだすこと、そのようなところにこそボン・サンスの役割があるように思われるのです。したがってボン・サンスはなるほどひとつの感覚(サンス)ではありますが、しかしほかの感覚がわたしたちを事物との関係のなかにおくのにたいしてボン・サンスはわたしたちの人びととの関係において重要な役割をはたしているということになります。』¹⁾ ところでルソー自身は子どもにおける感覚を磨く段階から社

*キーワード：サンス(感覚)、共感、ボン・サンス

**関西学院大学社会学部教授

1) LE BON SENS ET LES ETUDES CLASSIQUES, *Écrits et paroles*, p. 87

会感覚としてのボン・サンスを獲得する段階へのこうした移行をどのように認識していたであろうか。ルソーはかれの同時代の青年の教育がかれらに生きることを教えるつもりでじっさいには子どもの発達段階を無視した観念的な教育に終始している点を批判したあとつぎのように述べている。「わたしもわたしのエミールに生きることを教えた。わたしは自分自身とともに生きることをかれに教えた。そしてさらにパンを手に入れる方法を教えたのだ。だがそれだけでは足りない。世の中で生きるには、人々とつきあうことを知らなければならぬ。かれらの心をつかむ道具を知らなければならぬ。市民社会における個別的な利害の作用と反作用を計算しなければならぬ。そして出来事を正しく予測して、計画がめったに狂わないようにしなければならぬ。あるいは、とにかく、成功するためにいつでも最善の方法をとったことにならなければならぬ」²⁾と。

a. 第二の誕生

しかしながらこうした市民としての健全な判断力が子どものなかに育ってくるためにはその前提としてこの時期にさしかかった子どもにおける心身の両面にわたる著しい変化について正しい認識をもつことが是非とも必要なこととなる。「これまでのわたしたちの心づかいは子どもの遊びごとにすぎなかった。ここではじめて、それはほんとうに重要な意味をもつことになる。ふつうの教育が終わりとなるこの時期こそ、まさにわたしたちの教育をはじめなければならない時期だ」³⁾とルソーは述べている。それはこの時期が子どもにとってまさにルソーのいわゆる「危機の時代」⁴⁾ないし「第二の誕生」⁵⁾のそれにあたり、かなり短いとはいえ、長く深刻な影響を将来におよぼす時期だからにほかならない。「わたしたちは、いわば、二回この世に生まれる。一回目は存在するために、二回目は生きるために。はじめは人間に生まれ、つぎには男性か女性に生まれる」としたあとルソーはとくに男の子についてつぎのように

述べる。「暴風雨に先だってはやくから海が荒れさわぐように、この危険な変化は、あらわれはじめた情念のつぶやきによって予告される。にぶい音をたてて発酵しているものが危険の近づきつつあることを警告する。気分の変化、たびたびの興奮、たえまない精神の動揺が子どもをほとんど手におえなくする。まえには素直に従っていた人の声も聞こえなくなる。・・・子どもは指導者をもとめず、指導されることを欲しなくなる。

気分の変化を示す精神的なしんとともに、顔かたちにもいちじるしい変化があらわれる。容貌が整ってきて、ある特徴をおびてくる。頬の下のほうにはえてくるまばらな柔らかい毛はしだいに濃く密になる。声が変わる。というよりも声を失ってしまう。かれは子どもでも大人でもなく、そのどちらの声も出すことができない。目は、この魂の器官は、これまではなにも語らなかったが、ある言語と表情をもつことになる。燃えはじめた情熱が目には生気をあたえ、生き生きとしてきたそのまなざしにはまだ清らかな純真さを感じられるが、そこにはもう昔のようにほんやりしたところがない。目が口以上にものを言うことをかれはもう知っているのだ。かれは目を伏せたり、顔を赤らめたりすることができるようになる。なにを感じているのかまだわからないのに、それに感じやすくなる。理由もないのに落ち着かない気持ちになる。こういうことがすべてすこしづつあらわれてきて、あなたがたにはまだ十分に余裕がある場合もある。しかし、子どもの激しさがとうてい押さえることができなくなり、興奮が熱狂に変わり、瞬間的にいらだったり、感動したりしたら、わけもわからず涙を流すようになったら、かれにとって危険になりはじめた対象に近づくと動悸が高まったり、目を輝かせたりしたら、女性の手がかれの手にふれると身をふるわせるようになったら、女性のかたわらにいととりみだしたり、臆病になったりしたら、そのときは、オデュッセウスよ、おお、賢明なオデュッセウスよ、気をつけなければいけない。おんみがあればほど用心して閉

2) Pl. IV, *Émile*, p. 543

3) *Ibid.*, p. 490

4) *Ibid.*, p. 489

5) *Ibid.*, p. 490

じておいた袋の口はあいてしまったのだ。もうかぜはふきはじめている。ちょっとのあいだでも舵を放してはいけない。でなければなにもかもだめになってしまう⁶⁾と。

ところでこのように青年期にさしかかった子どもにおいてわたしたちがさらに知っておかなければならないのは、これまでの時期とはちがって自己愛が自尊心に変化することをもはや防ぐことはできない、という点であろう。そしてそのことが端的にあらわれるのがかれらの恋愛においてなのである。ルソーは恋愛における自尊心の芽ばえの不可避なことについてつぎのように述べている。「本能にもとづく好みははっきりと決まてはいない。一方の性が他方の性にひきつけられる。これが自然の衝動だ。よりごのみ、個人的な愛着は、知識、偏見、習慣からつくられる。わたしたちに恋愛が感じられるようになるためには、時と知識が必要なのだ。判断をしたあとではじめて人は恋をする。くらべてみたあとではじめて人はよりごのみをする。その判断は気がつかないうちに行われるのだが、とにかく、それは現実に行われるのだ⁷⁾と。また別の個所では「特別の愛着をもてば、相手からも特別の愛着をもたれたいと思う。恋愛は相互的なものでなければならぬ。愛されるには愛すべき人間にならなければならない。特別に愛されるためには、ほかの者よりもいっそう愛すべき者にならなければならない。ほかのだれよりも愛すべき者にならなければならない。少なくとも愛の対象の目にはそう映らなければならない。そこではじめて、自分と同じような人間に注目することになる。そこではじめて、自分をかれらにくらべてみる。そこから競争心、嫉妬心が生まれてくる⁸⁾」なども。もっともルソーが恋愛をこのように自尊心と結びつけて理解しようとしているとしても、だからといってルソーが恋愛をもっぱら否定的な視点より見ようとするのではない。ルソーはうえの最初の文章に引き続いてつぎのように述べている。「ほんとうの恋愛は人がなんとおもうと、いつも人々から敬意を寄せられる

だろう。恋愛の興奮はわたしたちの心を迷わせるにしても、恋愛はそれを感じている者の心からいまいましい性質を失わせることにならないにしても、そういう性質を生みだすことさえあるにしても、それにしても恋愛はいつも、すぐれた性質のあることを示しているのであって、それなしには人は恋愛を感じることはできないのだ。理性に反したことと考えられている選択は、じつは理性から生じてくるのだ。愛の神は盲目だといわれている。この神はわたしたちよりもするどい目をもっているからだ。そしてわたしたちにみとめられない関連を見ぬいているからだ。・・・恋は自然から生まれるなどとは、とんでもないことだ。それは自然の傾向を規制するもの、そのブレーキになるものだ。恋を感じればこそ、愛する対象を除けば異性はなんの意味もない存在となる⁹⁾と。ここで恋人の選択にさいしてはたらく理性とはきわめて実際的な場面においてはたらく直感ないし勘のようなものと考えられるからこれはむしろ恋愛におけるボン・サンスといってもよいのではなかろうか。いづれにせよ青年が自分にとってもっともふさわしい伴侶を選ぼうとするさいに恋愛は外見に反してかえってかれの的確な指針となってくれるということであろう。とはいえこうした恋愛から結婚へとすすむ段階にいたるまでにはエミールはなおいくつかの予備的な段階を通過していかなければならないし、またかれのように自然の順序にしたがって成長を遂げてきた青年の歩みが世間の青年たちのそれとくらべてどのような違いを見せるかという点にも十分な注意を払わなければならないであろう。

まず世間の青年たちについてはルソーはつぎのようにコメントしている。「先ばしった知識をあたえられ、それを実行に移す能力をひたすら待ちこがれている、世なれて洗練された子ども、文化的な子どもは、その能力が生じてくる時期について思いちがいをするようなことはけっしてない。そういう子どもは、待っているどころではない、その時期をはやめ、はやくから血を沸きたたせ

6) Ibid., pp. 489-490

7) Ibid., p. 493

8) Ibid., p. 494

9) Ibid., pp. 493-494

て、欲望を感じるずっとまえから、欲望の対象がどういふものであるべきかを知っている。自然がかれを刺激しているのではなく、かれが自然をせきたてているのだ。自然はかれを大人にするとき、かれに教えることはもうなにももたないのだ。かれは大人になるずっとまえから、気持ちのうえでは大人になっていたのだ¹⁰⁾と。一方、エミールのほうはどうか。かれの場合、情念はその発達していく期間が可能なかぎりひきのばされ、あらわれてくるにつれて整理されていく余裕があたえられてきているからそれに秩序と規則をあたえるのはもはや人間ではなくどこまでも自然だということになる¹¹⁾。ルソーはエミールのようなケースについてはつぎのように描写する。「自然の正しい歩みはもっと段階的に徐々に行われる。すこしずつ血が熱くなり、精気がつくりあげられ、体質ができあがっていく。製作を指導する賢明な職人はすべての器械を入念に完成してから、それらをもちいさせる。長いあいだの落ち着いた無気持ちは最初の欲望に先だち、長いあいだの無知が欲望の対象について思いがいをさせる。なにかわけがわからずに欲望を感じている。血が発酵し沸きたつ。ありあまる生命は外へひろがろうとする。目が生き生きしてきて、ほかの存在をながめ、わたしたちのまわりにいる人々に興味をもちはじめ、人間はひとりで生きるようにはつくられていないことを感じはじめる。こうして人間的な愛情にたいして心がひらかれ、愛着をもつことができるようになる¹²⁾と。この引用文の一部は先に『エミール』における「ボン・サンスの人」の基本的な性格について見たさいにすでにいちどとりあげたことがあるが、要するにエミールのように注意深く育てられた青年が最初に感じることのできる感情は、異性にたいする愛にさきだち、自分の身近に出会う人々にたいする友情であり人間愛だ、というのである。そしてそのような経過をたどる理由はめぐまれた単純さのうちに育てられた青年というものは、自然の基本的な衝動によってまずなによりもやさしい愛情にみちた情念

を周囲の人々にたいしてもつようになるということ、そしてひとたびおもいやりのある心の持ち主となったかれは自分と同じような人間の苦しみにたいしてふかく共感できるようになっているからにはかならない¹³⁾。

b. 青年に芽ばえ始めた社会感覚としての共感の能力を育む—善き行いの体験をつませること

それゆえ大切なのはあらわれはじめたこの感受性にいつその刺激をあたえ、それをさらに育んでいくことである。ルソーは語っている。「こうした感受性を導いていく、というよりはそうした自然の傾向に従っていくためには、わたしたちはいったいなにをしなければならぬのか。青年の心にみちあふれている力がはたらきかけることのできる対象、心をのびのびとさせ、ほかの存在のうえにひろげ、いたるところで自分の外に自分を見とめさせる対象をかれに示してやることではないか。心をしめつけ、内部に集中させ、人間の自我を緊張させるような対象を注意して遠ざけることではないか。つまり、ことばをかえていえば、親切な心、人間愛、同情心、慈悲ぶかい心など、おのずから人を喜ばせることになる、やさしく人をひきつけるあらゆる情念を刺激し、羨望の念、憎悪心など、人にいやがられる残酷な情念、いわば感受性を無意味にするばかりでなく、否定的にして、感じている者の心を苦しめることになるあらゆる情念をよびおこさないようにすることではないか¹⁴⁾と。ところでルソーによればこうした芽ばえはじめた青年の社会性を育てていく実際面での方策としてはつぎの三つに要約できるという。すなわちまず第一点目は、人間の心というものは自分よりも幸福な人の地位に身を置いて考えることができず、ただ自分よりみじめな人の地位において考えられるだけなので、青年にはほかの人たちの輝かしい身分を感嘆させるようなことはせず、むしろそうした場合でもそれをかれらにおける人間としてみじめな側面から示してやること¹⁵⁾。第二点目は人はただ自分もまぬがれえない

10) Ibid., pp. 501-502

11) Cf. ibid., p. 500

12) Ibid., p. 502

13) Cf. ibid., p. 502

14) Ibid., p. 506

15) Cf. ibid., pp. 506-507

と考えている他人の不幸だけにしか同情をよせることができないものであるから、不幸な人たちの運命はいつかかれの運命になるかもしれないこと、かれらの不幸のすべてはかれの足もとにも横たわっていること、無数の思いがけない不可避な出来事が一瞬ののちにかれをそこへ落としこむかもしれないことなどを十分に理解させるようにつとめること¹⁶⁾。第三点目は他人の不幸にたいして感じる同情は、その不幸の客観的な大小ではなく、その不幸に悩んでいる人が感じていると思われる感情に左右されるものなので、いかえればわたしたちが不幸な人に同情するのは、その人が同情すべき状態にあると考えられるかぎりにおいてであるので、わたしたちが自分と同じ人間の悩みや苦しみをどのくらい重くみるかは、けっきょくのところそうした人々にたいしてどれだけわたしたちが注意と尊敬をはらっているかその程度のかんによるということを理解させること¹⁷⁾。この以上の三つの点であるというのである。そしてルソーはこれにつづけてさらに言うのだ。「人類を構成しているのは民衆だ。民衆でないものはごくわずかなものなのだから、そういうものを考慮に入れる必要はない。人間はどんな身分であろうと同じ人間なのだ。そうだとしたら、いちばん人数の多い身分こそいちばん尊敬にあたいするのだ。考える人にとっては、社会的な差別はすべて消えうせる。かれは下僕のうちにも輝かしい人のうちにも同じ情念、同じ感情をみとめる。もちいる言語のちがいが、上っ面のよしあしをかれらのうちに区別するだけだ。もしなにか重要なちがいがかれらを区別するとしたら、ごまかしのおおいはうが不利になる。民衆はあるがままに自分を示し、愛想がよくない。ところが社交界の人たちはどうしても自分を隠さなければならない。あるがままの自分を示すとしたら、嫌悪をもようさせるにちがいないのだ¹⁸⁾と。また民衆に関してはさらにつぎのようにも述べている。「この階級の人

たちを研究してみるがいい。ことばづかいはちがっても、かれらはあなたがたと同じくらいの機知とあなた方以上のボン・サンスをもっていることがわかるだろう¹⁹⁾と。これらの文章はいずれも青年のなかに育ちはじめた共感能力が他人のなかにも自分とおなじ人間の運命を見いださせ、そうした運命の共有の自覚からついには万人平等の見方へと導くものであることを指摘しているのであるが、とくに一般の民衆を礼讃しているところなどにはわたしたちにおもわずモンテーニュをおもいおこさせるものがあるであろう。モンテーニュはかつてつぎのような文章を書き残していたのである。「もっともばかにしてはならない身分は、その単純さのために最後列にたたされている人々のそれであるとおもう。そしてかれらのもとに見られる交際のほうが、ずっと正常であるようにおもわれる。農夫たちの心もちやことばのほうが、一般にわれわれの哲学者たちのそれよりもずっと真の哲学の掟にかない、かつとどのついているとわたしはおもう²⁰⁾と。

いずれにせよ共感能力の獲得とともにエミールはあらたな段階、道徳的な秩序の段階へとすすむことになる。ルソーはこの段階についてまずつぎのように述べる。「ここでそういうことを語るべきだとするなら、心の最初の動きから良心の最初の声が聞こえてくることの、愛と憎しみの感情から善悪の最初の観念が生まれてくることの証明をわたしはこころみたい。「正義」と「善」はたんに抽象的なことば、悟性によってつくられるたんなる倫理的なものではなく、理性によって照らされた魂がほんとうに感じるものであること、それはわたしたちの原始的な感情の正しい進歩の一段階にほかならないこと、良心とかわりなしに、理性だけではどんな自然の掟も確立されないこと、そして、自然の権利も、人間の心の自然の要求にもとづくのでなければ、すべて幻影にすぎないこと、そういうことをわたしは証明したい²¹⁾

16) Cf. *ibid.*, pp. 507–508

17) Cf. *ibid.*, pp. 508–509

18) *Ibid.*, p. 509

19) *Ibid.*, p. 510

20) Michel de Montaigne, *Essais*, II. XVII, Sur la présomption, p. 284 (Reproduction en fac-similé de l'exemplaire de Bordeaux 1588, Slatkine), p. 314 (Traduction en français moderne par A. Lanly, Slatkine) 訳文は関根秀男訳『モンテーニュ随想録』(全訳縮刷版、白水社刊) 1197頁参照。

21) Pl. IV. *Émile*, pp. 522–523

と。とはいえ、ルソーのこうした意向は『エミール』の本文中では実現されておらず、さきに第一部においてみたようにこの著作のなかで一種のエピソードのかたちで挿入されることとなった「サヴォアの助任司祭の信仰告白」のなかで別立てで展開されているのであるが、それはつまるところここでは人間の発達過程に関連させて、感情と知識の秩序と進歩を示せばそれでよいとルソーが考えたからにほかならなかった²²⁾。ただしここでうに引用した文章につけくわえられた注として、さきにみた共感のもつ倫理性とも関係してくるつぎのような注目すべき文章をルソーは書きとめている。「他人にしてもらいたいと思っていることを他人にもしてやれという教訓も、良心と感情のほかにはほんとうの根拠をもたない。このわたしが他人の身になって行動する正確な理由はどこにあるのか。とくに自分が同じような場合にたちいたることはけっしてないことが道徳的に確実にわかっているときには、そういう理由はどこにあるのか。それに、この格率を完全に忠実にまもることによって、他人にもわたしにたいしてそれをまもらせることができるようになるのだれが責任をもっていえるのか。悪人は正しい人の正直と自分自身の不正から利益をひきだす。かれは自分を除いて世の中のすべての人が正しい人であれば大いにけっこうなことだと思っている。こういう取りきめは、人がなんといいおうとよい人間にとって大して有利なことではない。けれども、あふれでる魂の力がわたしをわたしと同じ人間に同化させ、いわばわたしをその人のなかに感じさせるばあいには、その人が苦しんでいることを欲しないのは、自分が苦しまないためなのだ。わたしは自分にたいする愛のために、その人に関心をもつのだ。だからうの教訓の根拠は、どんなところに自分が存在すると感じてわたしに快適な生活を願わせる自然そのものうちにあるのだ。そこでわたしは、自然の掟の教えがたんに理性にもとづいているというのは正しくない結論する。それにはもっと強固で確実な基礎がある。自分にたいする愛から派生する人々にたいする愛は、人間の

正義の原理である。倫理学ぜんたいの要約は、福音書のなかの掟の要約によってあたえられている²³⁾と。自愛を原理とする生き方がわたしたち人間においていかに根源的なことかであるかについてあらためて考えさせると同時に、こうした自愛を原理とする生き方から共生を原理とする生き方へと転換していくさいに共感ということがいかに決定的な役割をはたすものであるかについてこの文章いじょうに明瞭に表現することはできないであろう。

さてこころのなかによやく芽生えはじめた共感の能力によってエミールはいまや人が苦しんでいるのを見れば、自分も苦しむことができる優しい心の持ち主に育っているのであるが、しかしそれは不幸な人々を見てその救ってあげられる不幸をただあわれむだけで満足するむなしい残酷な同情心にとどまるようなことはけっしてあつてはならないし、またエミールのように育ったばあいはけっしてそのようなものにとどまることはないであろう。それはあらゆるみじめな人々にたいして関心を寄せているかれにとっては、そういう人々の不幸をなくす手段にたいしても同様に無関心ではいられないからである。ルソーはいう、「友人たちが仲が悪いのを見れば、エミールは仲間おりをさせてやろうとする。悲しんでいる人々を見れば、かれらの苦しみの理由をたずねる。二人の人間が憎みあっているのを見れば、かれらの憎しみの原因を知ろうとする。押さえつけられている者が権力者や財産家に迫害されて嘆いているのを見れば、その迫害がどういう形で行われているかをしらべる²⁴⁾と。またべつのところではこの共感と実践との関係について当時の身分社会という条件下において可能な慈善というものと考えあわせながらつぎのようにもいいあらわしている。「乳母たち、母親たちは、子どもにあたえる心づかいを通して子どもに愛着をもつ。社会的な徳の実践は人の心の底に人類愛をもたらす。人はよいことをすることによってこそよい人間になる。これ以上に確実な方法をわたしはしらない。あなたがた

22) Cf. *ibid.*, p. 523

23) *Ibid.*, p. 523

24) *Ibid.*, pp. 545-546

の生徒に、かれにできるあらゆるよい行いをさせるがいい。貧しい人々の利害はいつもかれの利害になるようにするのだ。財布だけでなく、かれの心づかいによって貧しい人々を助けさせるのだ。かれらのためになることをし、かれらをまもり、自分の体と時間をかれらに捧げさせるのだ。かれを貧しい人々の代理人にならせるのだ。かれは一生のあいだこれ以上に高尚な職務をはたすことはあるまい。これまで人に耳をかたむけてもらえなかったどれほど多くのしいたげられた人々が正しい裁きをあたえられることだろう。かれは徳の実践があたえる断固たる勇敢さをもってそういう人々のために正しい裁きをもとめるのだ。貴族や財産家の門をあけさせるのだ。必要とあれば、王座の下に行って不幸な人々の声を聞かせるのだ。そういう不幸な人々は、貧しいためにあらゆる道をとざされ、ひどい目にあわされながらも、罰せられはしないかという心配のために訴えて出る勇氣さえなくしているのだ²⁵⁾と。もっとも、ルソーはこのように述べたあと「かれはおこがましくも国政にくちばしをいれ、貴族や高官や国王のところへかけていって賢者を気どり、法の擁護者をもって任じ、裁判所の判事や弁護士のところへいって請願することになるのだろうか。そういうことはわたしには全然わからない²⁶⁾としたうえ、ようするにエミールはあくまでも自分の年齢にふさわしい有益なことを、よいこととわかっていることを勇敢にそして大胆に行えばそれでよいのだとしている。

ところでエミールが援助を求めている人々にたいしてどのような手をさしのべようとするかについてはもっぱらかれ自身の判断にゆだねるのはよいとしても、エミールをみまもる教師の立場としてルソー自身は慈善のあり方を基本的にとどのようなものでなければならないと考えていたのであろうか。青年の心に生まれはじめた自尊心を自分以外の者にふりむけさせることによって、それを他人の痛みや苦しみにたいする共感にかえることに成功しているかれはその後の発展についてもいまやはっきりとした展望をもつにいたっているのだ

ある。「自尊心を他の存在のうえにひろげよう。わたしたちはそれを美德に変えることになる。そして、この美德が根をもたない人間の心というものはないのだ。わたしたちの心づかいの対象が直接わたしたち自身に関係することが少なければ少ないほど、個人的利害にもとづく錯覚を恐れる必要は少なくなる。この利害を一般化すればするほど、それはいっそう公正になる。そして、人類にたいする愛とは、わたしたちにあっては、正義にたいする愛とは別のものではないのだ。そこで、エミールが真実を愛することを望むなら、真実を知ることを望むなら、なにかするときにはかれをかれ自身から遠いところにひきとめておくことにしよう。かれの心づかいが他人の幸福に捧げられることになればなるほど、それはいっそう賢明なことになるだろう。そして、かれは良いこと悪いことについて思いちがいをすることが少なくなるだろう。けれども、えこひいきや正しくない先入見だけにもとづいた盲目的な好みをかれに許すようなことはけっしてしまい。しかし、なんのためにかれはある者に害をあたえて他の者のためにつくすようなことをするのか。だれの手にもっとも大きい幸福のわけまえが落ちるかはかれにはどうでもよいことなのだ。すべての人の最大の幸福に協力することになりさえすればいいのだ。私生活の関心を別にすればそれが賢者の第一の関心だ。人はみな人類の一員であって、ほかの個人の一部ではないのだから。」²⁷⁾ また、共感もっている落とし穴に言及する形でつぎのようにも述べている。「同情が変じて弱みにならないようにするために、だから、それを一般化し、全人類のうえにひろげなければならない。そうすれば、正義と一致するかぎりにおいてのみ人は同情をもつことになる。あらゆる徳のなかで正義は人々の共同の幸福にいちばん役にたつものなのだから。道理からいっても、わたしたちにたいする愛からいっても、わたしたちの隣人よりも人類にたいしてはさらに大きな同情をもたなければならない。そして、悪人にたいする同情は人間にたいしてひじょうに残酷なことになる」²⁸⁾と。最大多数の最大幸

25) Ibid., pp. 543-544

26) Ibid., p. 544

27) Ibid., pp. 547-548

28) Ibid., p. 548

福こそなによりもまず目指さなければならない正義であり、共感もそうした正義にかなうものとして最終的には人類一般を目指すものでなければならない、というのである。このあたりまでくるとルソーが説くボン・サンスの教育論のなかにおいても哲学においてと同様、ルソーとカントの距離が俄然縮小してくるのをわれわれとしてもみとめないわけにはいかないのではなからうか。

c. この段階で習得させておくべき社会や人間についての政治学的倫理的な知識ならびにその理解の前提として人々の伝記などから学ばせておくべきこと

ルソーは青年が恋愛を経験するようになると自尊心の目覚めはもはや不可避だとする見解を表明していることはすでにみたとおりであるが、これはじつをいえばなにも恋愛にかぎったことではなく青年期に達すればいっばんにだれにでもおこることなのである。すなわち幼少少年期においてはわたしたちは自分のことだけを考えておればよかったのにたいして、青年期に到達して自分と同じ人間に注目するようになるのだいにかれらと自分とをくらべないわけにはいかなくなってくるからである。「わたしのエミールは、いままでは自分のことしか考えていなかったが、かれと同じ人間に注目するようになると、すぐに自分をかれらにくらべてみることになる。そして、この比較がかれのうちに呼び起こす最初の感情は、第一位を占めたいということだ。これは自分にたいする愛が自尊心に変わる地点、そしてそれに関係するあらゆる情念があらわれてくる地点だ」²⁹⁾とルソーは述べている。したがって問題はいったいどのような情念がかれの性格において支配的になるのか、そして人々のなかでじっさいにどのような地位を具体的にめざすことになるのかという点である。いうまでもなくエミールのばあい支配的な情念となるのはなによりもまず人間的なやさしい情念であり、好意と同情にみちた情念であって、けっして残酷で、人をうらやんだり、人のものをほしがるような情念でないことは十分に期待できること

なので、ここであらたに必要なことがあるとすれば、それはそのような心情を具体化するにあたってじっさいに役だってくれる人間社会についての知識をエミールにあたえることだということになるであろう。ルソーはここで『人間不平等起源論』や『社会契約論』の議論にふたたび立ち戻ってつぎの三点をまず教えることからはじめなければならない、としている。

すなわち、第一点目としては「その地位の獲得をめざすかれを導いていくために、人間に共通の偶有性によって人々の姿を示してやったのちに、こんどは、たがいにちがう点によって人々の姿を示してやらなければならない。ここで、自然的な、また社会的な不平等の程度が示され、社会秩序ぜんたいの一覧表が示されることになる」³⁰⁾とルソーは述べて人間に共通な運命を教えることでわたしたちに根源的な平等の観念をえさせる一方、自然的にも存在するものとしてみとめざるをえないわずかな差異と社会的な不平等のあいだには大きなひらきのあることについて論じた『人間不平等起源論』の一節を要約する。第二点目は「人間を通して社会を、社会を通して人間を研究しなければならない。政治学と倫理学を別々にとりあつかおうとする人々は、そのどちらにおいてもなにひとつ理解しないことになるのだ。まず原始的な関係に注目して、どうして人間はその影響をうけなければならないか、そして、そこからどういう情念が生まれてくるかをみる。逆に、情念が発達することによってその関係が複雑になり、緊密になることがわかる。人間を自由独立にするのは腕力ではなく、むしろ節度をわきまえた心である。少数のものにしか欲望を感じない人は少数の人にしか執着をもたない。ところが、わたしたちの無益な欲望を肉体的な必要とたえず混同しながら、肉体的な必要を人間社会の基礎としている人々はいつも結果を原因と考え、かれらのあらゆる推論においてまちがってばかりいる」³¹⁾と表現して、人間は社会生活のなかに組み込まれるようになるにしたがってたがいに比較し合うようになり、その結果自然的には存在するはずのないようなあら

29) Ibid., p. 523

30) Ibid., p. 524

31) Ibid., pp. 524-525

たな欲望が人為的に生みだされ、それが人間の相互依存関係を必要じょうに強めていることを理解させようとしたこれもまたうえとおなじく『人間不平等起源論』におけるもう一つの議論の要約をおこなうのである。第三点目としては「自然の状態には現実的な事実にもとづく破棄することのできない平等がある。自然の状態にあっては人間同志のたんなるちがい一方を他方に従属させるほど大きいことはありえないのだ」と述べたうえ「社会状態には架空のむなしい権利の平等がある。この平等を維持するための手段そのものがそれをぶちこわしているのだ。そして、弱者を押さえつけるために強者にあたえられている国家権力は、自然が両者のあいだにおいた一種の均衡を破っているのだ」³²⁾といううえの二点にくらべてすこしわかりにくいことばをつづけているのであるが、これはじつは『社会契約論』における当時のいわゆるアンシャンレジームの分析の要約にほかならず、たてまえや名目はともかくとして現実の法体系の根底にあるものがけっきょくのところいつも弱者にたいして強者を助け、もたざるものにたいしてもてるものを助けるための、いいかえれば力が権利であるとするところの暴力の論理にすぎないことをあきらかにしようとするものである。ただし、これらのことを十分に念を入れて青年に理解させるためには、その前提としてまず人間の心を知ることからはじめさせなければならぬ³³⁾、ともルソーは言う。

さて、ルソーの人間の心についての見解であるが、結論からさきにいえばそれは個人としてはいつも生まれながらの善良な性格を保持しつづけて

いるのにたいして、集団のメンバーとなったとたんにはそれは悪しきものに転じるということにつきるであろう。「青年がいっしょに暮らしている者にたいして好感をもつことができるようにその仲間を選んでやることをわたしは望みたい。また、世の中というものを十分によく知ることを学ばせ、そこで行われているあらゆることに嫌悪を感じさせたい。人間は生まれつき善良であることを知らせ、それを感じさせ、自分自身によって隣人を判断させたい。けれども、どんなふうにも社会が人間を墮落させ、悪くするかを見させ、人々の偏見のうちにかれらのあらゆる不徳の源をみいだし、個人の一人一人には尊敬をはらわせるが、群衆を軽蔑させ、人間はみんなほぼ同じような仮面をつけていること、しかしまた、なかには顔を覆っている仮面よりもずっと美しい顔があることをしらせたい」³⁴⁾とルソーはしるしている³⁵⁾。とはいえ青年を人間嫌いにさせることなく人間の不徳についての認識をえさせるといことはじつは至難のわざなのだ。ルソーはうえの文章につづけて述べている。「青年があんまりはやくから観察者になると、他人の行動をあんまりこまかく見ているようにかれを仕込むと、あなたがたはかれを、人の悪口を言ったり、あてこすりを言ったりする人間にすることになる、早急に断定的な判断をくだす人間にすることになる。かれはなにごとにおいてもいまわしい解釈をもとめ、なにかよいことでさえいい目で見ないことにいとうべき喜びを感じるようになる。とにかくかれは不徳をながめることになれ、恐怖を感じずに悪人を見ることになれてしまう。人々があわれとも思わずにかわいそう

32) Cf. *ibid.*, p. 525

33) *Ibid.*, p. 525

34) *Ibid.*, p. 525

35) 『社会契約論』において提示されている未来の共和国をあくまでもルソーの理想をあらわすものとの解釈にたてば、うえのような言い方はただちにルソーの真意を伝えるものとするにはできない、という反論ももちろんありうるであろう。しかし『社会契約論』の文脈からいえば共和国とは各人が自由に自然の恵みを受用していた過去の楽園である自然状態にもはや復帰がのぞめないじょう（なぜなら地上にはすでに自然が養う以上の人口過剰の状態がつづいているから）、集団生活の制約のなかで自然権の回復をめざすよりほかないと考えたルソーのあくまでも次善の策にすぎないものであった。いいかえればルソーがほんとうに求めていたのは全体主義的な性格の共和制ではなく、あくまでもそこにおいて回復されると考えられる自然権であった、ということである。ルソー自身の心情においてほんとうにいきづいていたもの、かれのなかにつねに消えることなく存在しつづけていた人間の理想的な生き方とはあくまでも自己完結的な自由な個人としての生き方であり、それがまず自然状態における人間のあり方として過去へと投影され、ついで未来の共和国のなかにわずかなりともその回復の希望をつなごうとしたと考えたいのである。いずれにせよわたしはルソーのなかにふかく根をおろしている個人主義的な考え方からいつときも目を離すべきではないと考えている。

な人たちを見るのになれてしまうのと同じだ。やがては一般的な不正はかれに教訓をあたえることなく、むしろ、弁解の口実をあたえることになる。人間がこんなふうなら、自分もそれとちがったものになろうとすべきではない、とかれはつぶやくことになる」³⁶⁾と。青年に人間を見せようとするのであればそれはけっして仮面をとおしてではなくあくまでもありのままの姿でなければならぬが、しかしまたあるがままの人間を見せることで青年をけっして人間嫌いにするようなことがあってもならないのだ。あるがままの人間を見せるのはあくまでもかれが人々をあわれみ、かれらと同じような者にはなりたくないと感じさせるためでなければならない³⁷⁾。はたしてこの困難な課題にこたえてくれるような方策は存在するのだろうか。

もちろん、それはある。しかしそのためには、これまでとってきたような道とは反対の道を、すなわち自分の経験をとおしてではなく、むしろ他人の経験をとおして青年を教育しなければならない。「人々がかれをあざむくならば、かれは人々を憎むだろう。しかし、自分は人々からはなれたところにおいてかれらがたがいにだましあっているのを見るとしたら、それをあわれと感じるだろう」³⁸⁾とルソーは述べている。それはあたかも舞台における俳優たちの演技を見物するように遠くから人々の争いをながめるための手段を講じることにほかならず、そしてこれこそルソーによればただひとつ歴史教育だけがなしうることなのである。ただし歴史と一言でいっても個性的な人物たちが数多く登場する古代ギリシャ、ローマのそれとルネッサンス以降の特徴のない人物たちしか登場しない近世のそれとを同列にあつかうことはできないし、またギリシャ、ローマの歴史をとくに重視するとしてもそれらはまたさまざまな描き方で描かれていることをみとめないわけにはいかな

い³⁹⁾。どのような種類の歴史書を選べばよいのであろうか。

さて問題は人間の心というものを知ることであるが、この点に関してもまたルソーはモンテニュにならうのがいちばんだとしてエッセイからつぎの文章を引用する。「伝記を書く人々は、事件よりも意図に、外に現れる事柄より内から発する事柄の方に、より多くの関心をもつものであるから、それだけ彼らはわたしにふさわしい。だから、なにごとにかけてもプルタルコスこそは、わが党の士である」⁴⁰⁾。伝記においては、人間はどんなに姿をかくそうとしてもむだで、歴史家はどこにでもついてくるものであるからである。「歴史家はその人間に息つくひまもあたえない。見ている者の鋭い目をさけるための片隅もあたえない。そして、その人間がうまく身をかくせたと思っているときにこそ、歴史家はいつそうよくかれを知らせることになるのだ」⁴¹⁾、とか「人の面影は重大な事実には見られないし、性格は偉大な行動にはあらわれない。天性が明らかにされるのはつまらないことによってなのだ」⁴²⁾などと記して、プルタルコスがこうした点でいかにすぐれた才能を発揮した歴史家であったかについてルソーは最大限の讃辞を呈している。とはいえ当面ルソーの関心の中心となるのはプルタルコスらの伝記作家たちがとりあげているそうした英雄たちのさまざまなエピソードのなかでもとくにかれらの虚栄心や野心を端的にあらわしているものにかざられよう。エミールを歴史に近づけようとした目的もまずもってここにあったからである。

ところで英雄たちの伝記というかたちで歴史の舞台を目の前にしたときエミールの最初の反応とはどのようなものであるだろうか。ルソーはそれをつぎのように想像させている。「幕があいて、はじめて世の中という芝居を目にしたときのエミール、というよりもむしろ、舞台裏に位置を

36) Ibid., pp. 525-526

37) Cf. ibid., p. 525

38) Ibid., p. 525

39) Cf. ibid., pp. 528-529

40) Ibid., p. 530, Michel de Montaigne, *Essais*, II. x, Sur les livres, p. 354 (Reproduction en fac-similé), pp. 86-87 (Traduction en français moderne), 邦訳 前掲書、762頁

41) Ibid., p. 530

42) Ibid., p. 531

占めて、俳優たちが衣装をつけたりぬいだりするのをながめ、観客の目をだます粗雑な魔術の道具である綱や滑車の数々を見ているエミールを思い浮かべてみよう。最初のおどろきにつづいて、すぐに、自分と同じ人間を恥ずかしく思う心とかれらにたいする軽蔑の念がわきあがってくるだろう。そんなふうにならぬ自分が自分自身にだまされ、そういう子どもじみた遊びごとをして自分をいやしめているのを見て、かれは憤慨するだろう。自分の同胞が夢みたいなことのためにたがいにつかみあっているのを見て、人間であることに満足できなかったために猛獣に変わっているのを見て、かれはかなしくなるだろう⁴³⁾などというように。そしてルソーがつぎにまず言及するのは、部下の將軍キネアスの諫止にもかかわらずみずからの際限のない領土的野心にしたがってつぎつぎと諸国をその手中におさめていったエペイロスの王ピロス (Pyrrhos, 前319—前272) が、占領地アルゴスでの戦闘中、相手方の若い一兵士の母親が息子を助けようと屋上から投げた瓦が頸部に命中してついに非業の死を遂げる話である⁴⁴⁾。むろん、征服者がすべて殺されたわけではない。王位の篡奪者がみんな計画に失敗したわけではない。普通の人々の目からすれば幾人かは幸運であったようにさえ見えるかもしれない。しかし、とルソーはいうのだ、「表面的なことに足をとめないで人間の幸福をその心の状態によってのみ判断する人は、かれらが成功したばあいにもみじめであることを知るだろう⁴⁵⁾と。それはかれらが幸運にめぐまれるにつれてかれらの心をさいなむ欲望と心配も同時にひろがりを見せ、大きくなっていくからにはほかならない。これはプルタルコスからの引用ではないがローマ初代皇帝のアウグストゥス (Augustus, 前63—後14) の例に言及する形でルソーはつぎのような文章を書いている。「アウグストゥスはローマの市民を服従させ、競争者を滅ぼしたのちに、四十年にわたってこれまで存在した最大の帝国を支配した。しかし、・・・すべて

の敵を征服したとしても、そのむなしい勝利がなんの役にたったろう。あらゆる種類の苦しみがたえずかれの周囲に生まれていたではないか。もっとも親しい友人たちがかれの生命に危害をくわえていたではないか。身近な者のすべての恥ずべき行いや死に泣かなければならなかったではないか。この不幸な男は世界を治めようとした。しかも自分の家を治めることもできなかったのだ。・・・⁴⁶⁾などなど。

いじょう二つの例はいずれも人間の虚栄心ないし野心というもののむなしさを端的にあらわすものであるが「しかし、自分を知り、死者の犠牲において賢明になるために歴史を研究しようとする者にたいしては、人間のあらゆる情念のたわむれは同じような教訓をあたえる⁴⁷⁾としてクレオパトラとの出会いの結果その運命が大きく転換することになったアントニウス (Antonius, 前82ころ—前30) にも言及している。むろん、エミールにはそうした情念のほんのわずかな体験もまだないし慎重に育てられてきているかれにはこれからもそうした体験をまねようとすることもないであろう。なぜならエミールにはいま人々を知ろうとする大きな関心と、かれらを判断するにあたっての十分な公平さとが、人間のあらゆる情念を理解できる程度の感受性と、情念にとらえられずすむ程度の心の平静さとが、ようするに人々を十分にたたく観察するための準備があるだけだからである⁴⁸⁾。

もっとも、致命的な過ちに陥る心配はまずないにしても人として免れることのできないかすかすの失敗はエミールといえどもくりかえすことであろう。そんなときもっともふさわしい手当の方法はそれをとがめだてるのではなくその状況に見合った寓話を讀ませることだ、とルソーはいう。なぜなら過ちをおかした者を寓話のなかの別の仮面のもとに批判することにすれば、かれの心を傷つけることなく寓話の真実とみずからの体験の本質とをどうじにまなばせることになるからである。賞

43) Ibid., p. 532

44) Cf. *ibid.*, p. 533

45) Ibid., p. 533

46) Ibid., pp. 533—534

47) Ibid., p. 534

48) Cf. *ibid.*, p. 536

讚のことばにだまされたことのない子どもにはラ・フォンテーヌの鳥と狐の寓話は理解できないであろうが、「へつらい者にだまされたばかりのまぬけ者には、鳥はばか者にすぎないことがすばらしくよくわかる」⁴⁹⁾からである。

d. そして宗教教育へ

さて、人間の心に関してまず伝記や寓話といった古典の知恵に学ばせるという議論をおえると周知のとおりルソーはエミールの宗教教育へと最終的に進んでいくことになるのであるが、これはあえて教育論とは別立てにしたエピソード『サヴォアの助任司祭の信仰告白』の形で人間の認識や実践の問題とからませた理性の限界内における宗教の問題として論理的批判的に展開しようとしていることは本論のはじめの部分でもみたとおりである。それゆえここで補足しておかなければならないことがあるとすればそれは宗教教育の方向とくにそうしたくべつな方向へとルソーをしてとらしめることとなった理由だけであろう。しかしつぎに掲げるかれのことばだけでもこの点に関してはすでになかなかな部分を答えてくれているといえるのではなかろうか。「子どもは父親の宗教のなかで育てられることになる。どんな宗教であっても、その宗教だけが正しく、ほかの宗教はすべて常軌を逸したこと、不条理なことにすぎないということを、子どもはいつも十分に証明してもらっているのだ。この点においては、論証の力は、そういうことを人々が論証している国に完全にいぞんしている。トルコ人はコンスタンティノープルにいて、キリスト教をひじょうにこっけいなものだと思っているが、パリへ行ってマホメット教がどんなふうに見られているか知ればいいのだ。憶見が勝利を占めるのはなによりも宗教の問題においてなのだ。しかし、あらゆることにおいて憶見の輓をはらいのけようとしているわたしたち、権威をいっさいみとめまいとしているわたしたち、どこの国へいってもエミールが自分自身で学べないことはなにひとつかれに教えたいとは思っていないわたしたちは、どんな宗教のなかでかれを育てたものだろう。自然の人間をどんな宗教に

加入させたらいいのか。答えはまったくかんたんだ、という気がする。わたしたちはかれをあの宗派にもこの宗派にも加入させまい。そんなことはしないで、理性をもっともよくもちいることがかれを導いていくことになる宗派を選べるような状態にかれをおいてやることにしよう。」⁵⁰⁾

なお、『サヴォアの助任司祭の信仰告白』の記述をおえるとルソーはふたたびエミールの現実の生活にたちもどりさきにも見たように世の中の習慣とどのように向かい合うかに言及する一方、人々との円滑な共生に必要な心得としての礼儀や趣味の問題などについても論じているのであるがいまはとりあげない。また、エミールのもっともふさわしい伴侶として登場することとなるなるソフィーのひととなりや教育についての検討も別の機会にゆずりたいとおもう。

49) Ibid., pp. 540-541

50) Ibid., p. 558

L'Éducation du Bon Sens et la Philosophie de la Raison Sur l'*Émile* de J.-J. Rousseau (*suite*)

ABSTRACT

Reprenant la conception cartésienne des cinq sens, Bergson dit que leur rôle principal est moins de nous faire connaître les objets matériels que de nous en signaler l'utilité. En d'autres termes, nos sens sont tournés, avant tout, vers la vie pratique et non pas vers la connaissance objective des choses. Il ne s'agit là, pour le moment, que des inconvénients ou des avantages que les choses ont pour nous. D'ailleurs, nous ne vivons pas seulement parmi les choses, mais aussi parmi les personnes. Tous nos mouvements dans l'espace nous affecteront d'abord, ensuite les gens qui vivent avec nous. Ainsi il nous importe aussi de prévoir ces conséquences, ou plutôt de les pressentir. Selon Bergson, cette capacité de prévision n'est rien d'autre que celle du bon sens (Cf. *Écrits et paroles* I., p. 85, P.U.F.). Cependant, lorsqu'on revient au problème du développement de l'enfant, n'y aurait-il rien à ajouter sur cette relation des sens au bon sens? Le stade de l'éducation des sens correspond, chez Rousseau, à celui de l'apprentissage de l'amour de soi et le stade de l'éducation du bon sens à celui de l'apprentissage de la collaboration. Or entre ces deux stades, Rousseau met une période unique qu'on pourrait appeler *la période du développement de la sympathie*. C'est cette période qui constituera, cette fois, notre sujet principal.

Key Words: *les sens, la sympathie (la pitié, la compassion), le bon sens*